上杉和央・香川雄一・近藤章夫　編
『みわたす・つなげる人文地理学』
古今書院　2021年11月　109頁　2,400円＋税

大学の講義で使用する人文地理学のテキストはこれまでもいくつか出版され，大学の地理学教育の現場で使用されている。テキストそのものを使用する場合もあれば，評者のようにいくつかのテキストや論文から自身で講義内容を構成する場合も少なくない。そして，大学の地理学の講義で評者も含め教員の多くが授業の冒頭で述べるであろうセリフは，「高校までの地理と大学の地理学は違う」ということであろう。これは高校までの地理が知識を詰め込むものであり，大学の地理学が研究のための学問である，という意図をもった言葉であることは疑いようがないわけであるが，高校までの地理と大学の地理学との間の大きな断絶のようなものが横たわっている印象を与える。また，教職課程を履修する学生に対しても中学や高校の授業で実際に使用するための知識として，あるいは教員採用試験対策として，大学の教職課程の地理学の授業ではどちらかというと高校までの地理の内容がメインになることもあるかもしれない。そして，一般教養科目としての地理学の授業を履修する学生の多くが高校で地理を履修しておらず，地理に対するある種の苦手意識―国名や地名，生産量などをひたすら暗記する科目への忌避感？―を持っている学生も一定数いることも確かである。

評者も人文地理学や地理学の概論の授業をいくつか担当しているが，上記のような学生の声をアンケートなどで知ることが多く，学生が地理学に興味を持つような授業の工夫は決して簡単ではない。オリジナルのレジュメやテキストを作成するのもなかなか一苦労である。地理学の魅力について授業の準備や実施を通じて考えることもしばしばであるが，2021年11月にその魅力を端的に教えてくれるテキストとして本書が出版された。本書は大学の教職課程などで初めて地理学に接する学生向けに執筆された人文地理学のテキストである。タイトルにあるように，様々な事象を多様な空間スケールを変えながら「みわたす」とともに，それらを「つなげる」ことで我々が住む世界を身近なものからグローバルな出来事まで，そして現在と過去を互いに比較検討する道筋―そしてこれこそが地理学の魅力でもある―を本書は様々な事例を通じて示している。

さて，ここで本書の構成を述べておく。本書は大学の人文地理学の講義での使用を意図して執筆されたものであることから，半期の授業回数に相当する15章で構成されている。また，「はじめに」と「おわりに」ではそれぞれ本書の構成と意図，展望について述べられている。各章の分量は6ページずつで，ほとんどの章に1～2個のコラムがある。各章とも読み切りの形で，分量・内容ともにコンパクトにして的確な印象である。

はじめに（編著者一同）
1　人文地理学とは何か（上杉和央・香川雄一・近藤章夫・小野映介・吉田圭一郎）
2　人口（近藤章夫）
3　資源・エネルギー（近藤章夫）
4　農林水産業の立地と分布（上杉和央）
5　工業化と経済発展（近藤章夫）
6　流通と交易（近藤章夫）
7　ネットワークと社会（近藤章夫・上杉和央）
8　観光と地域（香川雄一・上杉和央）
9　集落の形態と構造（上杉和央）
10　都市と社会（香川雄一）
11　開発と地域（香川雄一）
12　国土政策・地域政策（香川雄一）
13　環境問題（香川雄一）
14　世界と日本―「国家」の地理―（近藤章夫・香川雄一・上杉和央）
15　地理学と社会（上杉和央・香川雄一・近藤章夫）
引用文献・参考文献
おわりに（編著者一同）

本稿では紙面の関係で全ての章をそれぞれ紹介するのではなく，各章の趣旨や扱われている特徴的な事例，本書全体の中の位置づけについて概観する。

まず1章の「人文地理学とは何か？」との問いから始まる。Geoをgraphする学問であり，地の理（ことわり）を考察するという地理学の語源が学問の本質を示しており，近代地理学の発展を経て現在の地理学がいくつかの転回によって多様化

する，という学史は地理学を学ぶ上で押さえておくべき重要な内容である。それとともにGeoをgraphするためにはが特定の視点から「みわたす力」とともに関連する視点の知識を「つなげる力」が不可欠であることが示されている。そして本書の構成とその意図が述べられている。

2章のテーマは人口であるが，人口の増減や移動が過去そして現代のあらゆる地理学的な現象に深く関わるものであることから，資源や産業，流通や流動，都市，観光，環境問題，ネットワークなど本書のこれ以降のテーマの基礎となる重要なものとして2番目に位置づけられている。3章は資源の分布と地理的偏在や日本の輸入先，持続可能な社会とエネルギーについて，4章では農林水産業の分布と環境問題，チューネンモデル，都市近郊の農業の歴史および現代の展開について，5章では工業化と経済発展にかかわるウェーバーの工業立地モデルや日本の工業立地，工業生産のグローバル化についてそれぞれ述べられている。3～5章は資源および農林水産業や鉱工業の生産が共通のテーマであり，6～8章はそれらの資源や生産物の流通・流動についての内容となっている。6章では日本の産業構造における商業・流通の位置づけの変化から始まり，様々な小売業の変化や日本の貿易について，7章では大航海時代以降の世界史の貿易から交通網の発達によるネットワークの変化，5章でも触れられた企業間のグローバルなネットワーク，都市間のネットワーク，そして感染症の拡大を通じたネットワークの特徴について，8章では観光業の発展に伴う観光地の変化，とりわけ重要文化的景観や日常生活の観光地化による課題について，それぞれ扱われている。

続いて9章と10章は集落と都市に関するものである。9章では村落の構造モデルについて地理学や民俗学の知見が紹介されるとともに，都市の階層構造と都市の空間構造についてのオーソドックスなモデルが紹介されている。10章では続けて都市内部の民族ごとのすみわけ（セグリゲーション）や都心付近エリアの再開発による活性化（ジェントリフィケーション）を扱っている。

11～14章はこれまでの2～10章の内容を基礎として，各章の内容を「みわたし」ながら現代社会の諸現象や諸問題について考える，という応用的な内容であり，これまでの章の内容を「つなげる」視点が重要となる。11章はロンドンの田園都市構想やカナート，ニューディール政策によるアメリカのテネシー川の水資源開発などの歴史的な事例とともに現代都市の再開発について，12章では第二次世界大戦後の日本の国土開発の変遷と現代そして将来について，13章では日本の環境問題の歴史と現状および世界の環境問題と持続可能性について，14章では国民国家の成立，領域の地図化とナショナリズム，などが扱われている。繰り返しになるが，いずれもこれまでの2～10章の内容とも密接に関わるものである。

そして15章ではこれまでの内容のまとめと地理学の本質について，とりわけ「みわたす力」と「つなげる力」によって世界をどのように考え，世界とどのように関わりながら様々な課題と向き合うか，を再確認する。また，インターネットが日常生活において当たり前となっている生活の中で利用される地図にも，様々な地理学が詰まっていることも述べられている。

以上が本書の章構成と概要であるが，ここからは本書の特長についていくつか述べていきたい。まず第一に本書全体の特長であるが，前述のように大学の人文地理学のテキストとして執筆された本書は高校の地理と大学の地理学との接続とともに，地理学の初学者への配慮の意図が見られる点である。たとえば，地理学の論文や研究書の理論や図表ももちろん引用され，参考文献にも挙げられているが，高校の地理の教科書や資料集に掲載されている地図や図表も多用されている。本稿の冒頭でも述べたように教職課程の受講者にとっても有益であるし，初学者にとっても導入として適切なのはいうまでもない。

また，第一の点とも関連するが，第二に各章の内容および構成は地理学の初学者の導入にふさわしいものになっていると同時に，様々な空間現象や地理学的現象を考える上で，換言すれば「みわたし」「つなげる」上で必要な理論が過不足なく紹介されている点である。しかも地理学のみならず関連する経済学や社会学，政治学などの分野の重要な概念や理論も紹介されており，受講する学生が地理学だけを学ぶのではなく，隣接分野の研究成果を「みわたし」，空間現象を理解するために「つなげる」視点を提供している。

第三の特長として，「みわたす」範囲に空間的なスケールに加えて時間的ないし歴史的な事象も含まれる点が挙げられる。人文地理学の授業というと，ともすると現代の事例がメインになりがちだが，現代の諸現象は過去の結果であることから，その現象についての歴史的な背景を「みわたす」ことも必須である。その意味で本書では，世界人口の歴史的な推移（2章）や京野菜の栽培状況（4章），三角貿易と海流の関係（7章），村落形態の空中写真と地図（9章），田園都市構造（11章），など歴史地理学でもよく扱われる事例が随所で紹介されており，人文地理学の中でも現代的なトピックとともに歴史地理学的なものがバランスよく配置されている。

第四は第三の点とも関係するが，地理学の学史が的確かつコンパクトにまとめられており，各章で現在の地理学研究に至るまでの重要なモデルや概念，理論が紹介されている点である。事象だけでなく地理学という学問を「みわたす」上で学史は欠かせないものである。くわえてチューネンモデル（4章）やウェーバーの工業立地論（5章），クリスタラーの中心地理論とバージェスによる都市の同心円モデル（9章）など，現在の地理学研究で顧みられることは少なくなったものの，それぞれの時代において重要な理論やモデルを踏まえて現在の研究を概観すること，研究史を整理することの重要性を地理学の初学者に伝えようとする意図が見られる。

このように本書は過不足なく，必要な点，いわば「ツボ」が適切に押さえられており，テキストとして大変すばらしいものである。その一方で評者が気になった点を若干挙げると次の点になろうか。1つ目は先に挙げたチューネンやウェーバー，クリスタラーなどの古典的な地理学のモデルの説明についてである。たしかにこれらのモデルは地理学史の説明で避けて通れないものであるが，各章の中でこれらのモデルの説明がその後の研究とどう関わるかについてもう少し説明があればと思う。たとえばウェーバーの工業立地論は現代では工業そのものの立地の説明には確かに不向きな面が多いかもしれないが，保育所などの公共施設の立地計画においてウェーバーの理論が応用されることがある[1]。こうした古典的な理論が単に学史の中の1つの理論としてだけではなく，現代においてどのように関わるのか，紙面の関係もあって難しいと思われるが，本文中でなくともコラムや注釈などで記述があればと思う。2つ目は評者の問題関心と関わることであるが，文化や社会に関する内容の章が一つ加えて頂ければと思った。本書の中でも観光（8章）や都市（10章），世界と日本（14章）をはじめ各章の中で事例が紹介されているが，文化論的転回（1章）の用語が紹介されていたように，こうした地理学研究の新しい動きについてもう少し詳しく説明する章が一つあればと評者は考えるが，紙面の都合もあるだろうか。

3つ目に気なった点としては，本文中のいくつかの表現や用語の記載についてである。本書の15ページ目の第三段落の「死亡率は医学の進歩や上下水道のインフラ整備や医学の進歩で」の文章中で「医学の進歩」が重複していたり，31ページの経済連携協定の略称がEPAではなくRPAとなっている。細かい点で大変恐縮である。

ただ，こうした評者の気になった点は本書の特長に比べれば取るに足らない注文であるかもしれない。本書が『みわたす・つなげる自然地理学』，『みわたす・つなげる地誌学』と「三位一体」（本書97ページ）を為す書物として地理学の魅力を発信する，新たなる「伝道の書」として広く用いられることを期待したい。

（麻生　将）

〔注〕

1）杉浦芳夫『地理学講座第5巻　立地と空間的行動』古今書院，1989，74-82頁。また，チューネンモデルも都市内の土地利用の分布を説明する際に使用されることもある。同書30-31頁。